

「問い」続ける道徳授業

谷口 雄一（和歌山市立鳴滝小学校）

1. 道徳の「教科化」の議論 ～その背景～

現在、政府の教育再生実行会議では、道徳の時間を教科にしようという議論がなされている。これは、我々教育者、とりわけ、道徳の時間や道徳教育が子どもの心の成長のために大きな力になっていると考えている者にとって、大きな関心事となっている。

道徳の「教科化」の議論、その背景には何があるのだろうか？

① 現在の子ども

社会はより一層めまぐるしく変化をとげている。それにともない、子どもを取り巻く環境は、物質的には豊かになったと言えよう。一方、精神的には空洞化している面があり、社会の抱えている歪みが成長期の子どものさまざまな影響をおよぼしている。好ましい人間関係や生活経験が少なく、自分を広い視野から見つめることができにくい状況にいると言えるだろう。子どもの中には、「自分さえよければいい」と自己中心的な考えの子や、「みんなもやってるもん」と周りに左右されやすい子、大人の指示を待たなければ行動できない子も少なくない。

また、新聞やTV等では、毎日のように命を軽んじた事件が報道されている。非行やいじめといった問題が根強く残っていることも残念ながら事実である。

② 現在の道徳授業

道徳の時間について、学習指導要領解説道徳編において、「道徳の時間の学習指導過程は、一般的には、以下のように、導入、展開、終末の各段階を設定することが広く行われている。このような指導を基本とするが、いたずらに固定化、形式化することなく、弾力的に扱うなどの工夫をすることが大切である。（※下線は筆者）」と書かれている。つまり、児童の実態や扱う資料の特質などを考えながら創意工夫していくものであり、「こうすべき」といった明確なスタイルはないといえる。

しかし、全国の先生方と話していると、「〇〇方式」というように各地方それぞれに一定の型が存在していることを感じる。先輩や同僚から、「道徳の時間はこうするべきだよ。」と教えられ、毎回同じような授業になっていることが多いのではないかと思う。加えて、「このとき、主人公はどんな気持ちだったのでしょうか。」と、場面場面での気持ちを問う発問を繰り返してはいないだろうか？その結果、黒板には、右から左へと主人公の気持ちの変化が記される。そして、地域によっては、教師の説話、またある地域では、「自分たちの生活ではどうだろうか？」と価値の一般化がなされる。「主人公がそんな気持ちになったのはなぜか？」「主人公にそうさせたものは何か？」といったその授業のテーマにせまることなく1時間を終わってしまっていないだろうか？

このような型でも授業が行われているのならまだいい。数字の上では、年間35時間の道徳の時間はほぼ確保されている。だが、中身は、クラス内の問題について話し合うことや、エンカウンターやスキルトレーニングを行ったり、車椅子体験をしたりと、道徳の時間という看板と店の中身が違うという現状もある。

前項①②で述べたような理由から、現在、これまで以上に心の教育の重要性が叫ばれている。そして、道徳の時間を教科にしようという議論がなされているというわけである。

それでは、我々はどのような道徳授業を開発すればよいのか？これからを展望する授業づくりとはいかなるものなのか？私の考えを述べたい。

2. 「問い」続ける道徳授業

道徳の時間に関わらず、授業を構成し、子どもの学びに最も重要な役割を果たしているのは発問であることは言うまでもない。ここでは、発問という枠にとらわれることなく、「問い」という視点から道徳の授業づくりについて考えていきたい。

① 子どもが自ら「問う」

・導入 ～広げる？せばめる？～

導入は授業の入口である。学習指導要領解説道徳編には、「具体的には、①本時の主題にかかわる問題意識をもたせる導入、②資料の内容に興味や関心をもたせる導入、③学習への雰囲気作りを大切にした導入などが考えられる。(※丸数字と下線は筆者)」と3つ例示されている。前者から後者に向かうにつれ、展開への扉は広がっている。

①については、例えば、「今日は友情について考えよう」や「どんな人を友達っていいのか？」といったものである。本時のテーマについてははっきりとさせることで、子どもの心に課題意識をもたせることができる。しかし、導入の時点で本時の主題を明確にすることで、他の内容項目に関するものなど多様な発言の妨げになるのではないかと考えることもある。また、導入で投げかけたことが、その後の展開や終末において十分には生かされていないのではないかと感じる授業も多い。

②は、「今日のお話には、オオカミさんが出てくるよ。でも、このオオカミさん、すごくいじわるなんだって。どんなお話だろうね？」や「今日のお話は、鳥さんがいっぱい出てくるよ。どんなお話だろうね？」といった感じだろうか。主に1年生など低学年に有効である。しかし、子どもの思考がお話の中だけにとどまってしまうのだろうか？や国語科の授業みたいだという考えもある。

③は、子ども達が自由に自分の思いを出しやすいうようにすることに重きを置いている。例えば、みんなで歌を歌うなど、アイスブレイキングの要素が強い。そのため、学習への雰囲気ができている学級には必要ないものと言えるかもしれない。

以上のように、それぞれにそのよさがある。

それでは、私は授業の際、どのような導入をしているのか。その一例を紹介したい(図1)。

③ 学習展開			
	学習活動	おもな発問と予想される子どもの心の動き	教師の支援
気 づ く	1 本時の学習のテーマについて投げかける。 ○今日も「生きる」ということについてみんなで考えたいと思います。今日の生きるは「どんな」生きるのか考えながらみんなで学習していきましょう。		○「どんな」と強調することで、課題意識をもたせたい。
深	2 資料「道」を切りひらく ー松下幸之助ー を読んで話し合う。 ○どんなことが心に残ったかな？ ・寝る間も惜しんでソケットの改良を続けた。 ・新製品を次々と考えだし、会社を大きく発展させていった。 ・「世界が豊かに栄えることこそが人々に幸福で平和な生活をもたらす」という考え。		○心に残ったことだけでなく、その理由も発表させる。 ○挿絵を掲示するとともに、子どもの発言の中にある幸之助の気持ちを板書する。

図1 導入の工夫 ～6年「道」を切りひらく ー松下幸之助ー の実践より～

私は「生きる」という言葉を黒板に書くことから授業を始めている。そして、「今日も授業を通して自分の生き方について考えようね。今日のお話は、どんな“生きる”なんだろうね？」と投げかけ、資料を範読していく。この「どんな“生きる”」と問うことで、授業に対する課題意識をもたせることをねらっている。

・中心発問 ～場面発問か テーマ発問か～

道徳の授業改善の1つとして中心発問についての議論がある。それは、テーマ発問がよいのか場面発問がよいのかといったものである。ここでは、私の考えについて、それぞれの発問を用いた実践を紹介しながら述べたいと思う。

【実践例1： 4年 ないた赤おに】

ないた赤おには、道徳授業の定番資料の1つで長年使われている。そのため、数多くの実践例がある。そして、低学年を中心に、上は中学校まで広く実践されている。私も大好きな資料の1つである。

今回は、久しぶりに青おにの家を訪ね、青おにからの貼り紙を読みながら涙を流す赤おにの気持ちを考えることを柱に授業を展開しようと考えた。そして、自分のしたことについての後悔と青おにからたくさん友情を受け取っていたことを感じ取らせたいと思っていた。

その上で、「赤おにと青おには、友達といえるのか？」と投げかけることで、本時のテーマである信頼・友情についての子どもの考えを深めたいと考え、今回、テーマ発問を中心にした(図2)。

図2 中心発問の一例 ～4年 ないた赤おに の実践より～

授業では、導入において「友達ってどんな人のことを言うのかな？」と投げかけることから授業を始めた。この問いに対して、子どもは、「優しくしてくれる」や「すぐに声をかけてくれる」

「しんどい時に保健室に連れて行ってくれる」、「さそって くれる」、「困った時に相談にのってくれる」、「優しく教えてくれる」といったように答えている。そこで、子どもに、自分は今「～してくれる人」や「近くにいてくれる人」を友達と考えているんだということを意識させておいた。そして、授業の終わりに、赤おにと青おにはこのようなことができない状況にあることを取り上げ、T39「(この2人は) 友達っていえるの？みんなはどう思いますか？」と問いかけた(図3)。

これに対して、C49の「赤おにのためにやったこと」やC50「赤おにのことを思って離れ離れになった」と、友達との身体的な距離ではなく、互いの心が寄り添っていることが大切だという考えを示している。感想からもこのことがうかがえた。

T38 最後にみんなに聞きたいんだけど、赤おにと青おにって、この2人って友達？ 【児童、「うん、友達。」と答える】	
T39 ここ見てよ。みんなに最初に考えてもらいましたよね。友達ってどんな人って。すぐに声をかけてくれるって言っていたけど、今、声をかけてくれる？相談にのってくれる？今、困っているよね。教えてくれる？何かできる？できないよね。友達っていえるの？みんなはどう思いますか？	
C46 赤おには人間と仲よくしたくて、青おには助けられたから、人間と友達になった。	○指導者は現在の二人の状況をもとに考えさせたかったが、C46～C48から、児童は離れ離れになる前の二人の関係から考えていることが分かる。
C47 青おにはすぐ声をかけてたり、暴れた時に味方になってくれたり、相談にのってくれたから、友達だと思います。	
T40 他の子は？	
C48 C47さんと同じで、今まで青おにが赤おにの味方になってくれたから、友達といえると思います。	
T41 でも、今、味方になれやんよ。今、離れ離れになっているよ。	○「今、離れ離れ」と現在の二人の置かれている状況を強調することで、身体的な距離ではなく、心理的な近さが大切だということに目を向けさせた。それが、C49やC50の「赤おにのことを思って」という言葉につながった。
C49 旅に出たけど、青おにと仲よくしてたら赤おにが人間と仲よくできないから、赤おにのためにやったことだと思います。	
C50 赤おにと一緒にいたら村人が逃げるから、赤おにのことを思って離れ離れになった。	
T42 言ってくれたことを合わせると、離れ離れになっているけど、それは赤おにのことを思ってやったから友達っていえるってこと？じゃあ、時間なので、今日はここで終わります。授業中に書けなかったけど、プリントは家で書いてきてね。	
【感想を書くプリントを配布する】	

図3 中心発問と展開の実際 ～4年 ないた赤おに の実践より～

【実践例2： 6年 ロレンゾの友達】

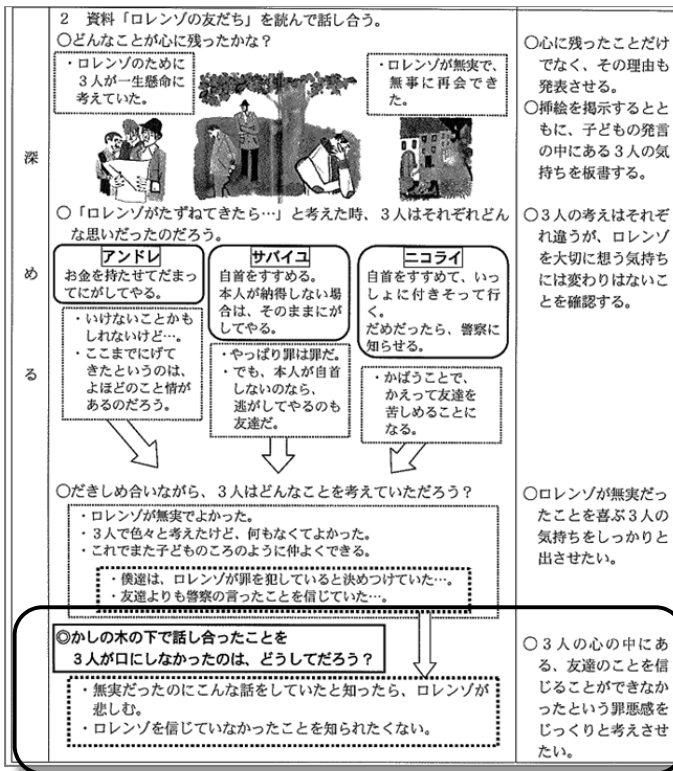


図4 中心発問の一例 ～6年 ロレンゾの友達 の実践より～

ロレンゾとアンドレ、サバイユ、ニコライの4人の幼なじみの話である。

ロレンゾから3人に、「20年ぶりの再会を楽しみにしている」と手紙がくる。しかし、ロレンゾが会社の金を持ち逃げしたと聞いた3人は、どうしようかと悩む。アンドレは「お金を持たせて黙って逃がしてやる」、サバイユは「自首をすすめて、本人が納得しない場合は、そのまま逃がしてやる」、ニコライは「自首をすすめる。だめだったら、警察に知らせる」と、それぞれが友のことを考え、3人で話し合う。翌朝、町の警察署に呼ばれた3人は、ロレンゾと再会し、警察の手違いだったことを知る。4人は大笑いしながら、あらん限りの力で抱きしめ合い、再会を喜ぶというお話である。

今回は、3人が話し合う場面で、それぞれの考えの根底にある「ロレンゾを想う気持ち」をじっくりと考えさせたいと考えた。その上で、「どうしてそのことを3人とも口にしなかったのだろうか？」と問いかけ、友達として大切なことに気づかせ、互いに信頼し合おうとする心を育てることをねらった(図4)。

中心発問であるT25「かしの木の下で話し合ったことを3人が口にしなかったのは、どうしてだろう？」については、C36「もし口にしたら、ロレンゾが傷つくかもしれないから。」と、ロレンゾへの申し訳無さを引き出すことができた(図5)。

そして、この後の子どもの発言は、C36「それと、そんなことを考えていた自分自身も思いたくなかったから。」やC37「ロレンゾに、友達にも疑われていたと思われたくなかったから。」、C38「このことを話したら、ロレンゾに、疑われていると思われるのが嫌だった。」と、ロレンゾのことを想う気持ちよりは、保身ともとれるものが出てきた。

授業では残り時間を考え、最後の発問に移らざるをえなかった。しかし、この時、例えば「こんなことを3人に思わせてしまうものは一体何なんだろう？」とさらに問うことで、本時のねらいである信頼や友情といったテーマにより深くせまるのではないかと感じた。

このように、私は中心発問においては、時にはテーマ発問で、そして、時には場面発問で、両方を使いながら子ども達に問いかけている。ここで大切にしたいと考えていることは、実は、中心発問は「問い」続けていくためのスタートだということである。どちらの発問であっても、私は子どもの発言に対して問い返したり、他の子どもに広げたりする。その繰り返しの中で、子どもは自ら「問い」続け、我々が子ども達にその授業を通して学んでもらいたいものを、子ども自らが獲得していくのではないかと私は考える。

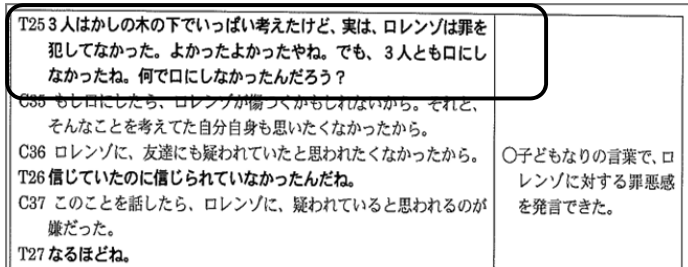


図5 中心発問と展開の実際 ～6年 ロレンゾの友達 の実践より～

② 授業が終わっても「問い」続ける

「① 子どもが自ら「問う」では、導入と中心発問を取り上げて、授業中の「問い」について述べた。学習指導要領解説道徳編では、「道徳の時間においては、(※途中省略) 計画的、発展的な指導によってこれを補充、深化、統合し、(※以下省略)」と書かれている。そのために、我々は、前章で述べたように授業展開を工夫するわけである。しかし、それでいいのだろうか？子どもの道徳性を補充し深化し統合し、道徳的実践力を育成すればそれで終わりなのだろうか？私は違うと思う。ここからがスタートだと考えている。

本章では、授業後の子どもの思考を連続させていく工夫についての私の考えを、実践を交えながら紹介していきたい。

・子どもの考えにさらに「問う」 ～プリントや道徳ノートの活用～

道徳の時間に関わらず、授業の終わりに感想を書かせることは多い。

書くことで、授業中に自分の考えを話すことができた子はもちろんのこと、発言することができなかった子も、それぞれ、もう一度自分の心の中を整理し、思いを文字にすることができる。指導者も感想に目を通すことで、授業が子ども達にとってどうだったかを評価することができる。このため、私も子ども達に授業を通して感じたことや考えたことを書かせている。

しかし、そこで終わっていることが多くないだろうか？私は、プリントを以下のような状態にし、子どもに返している(図6)。

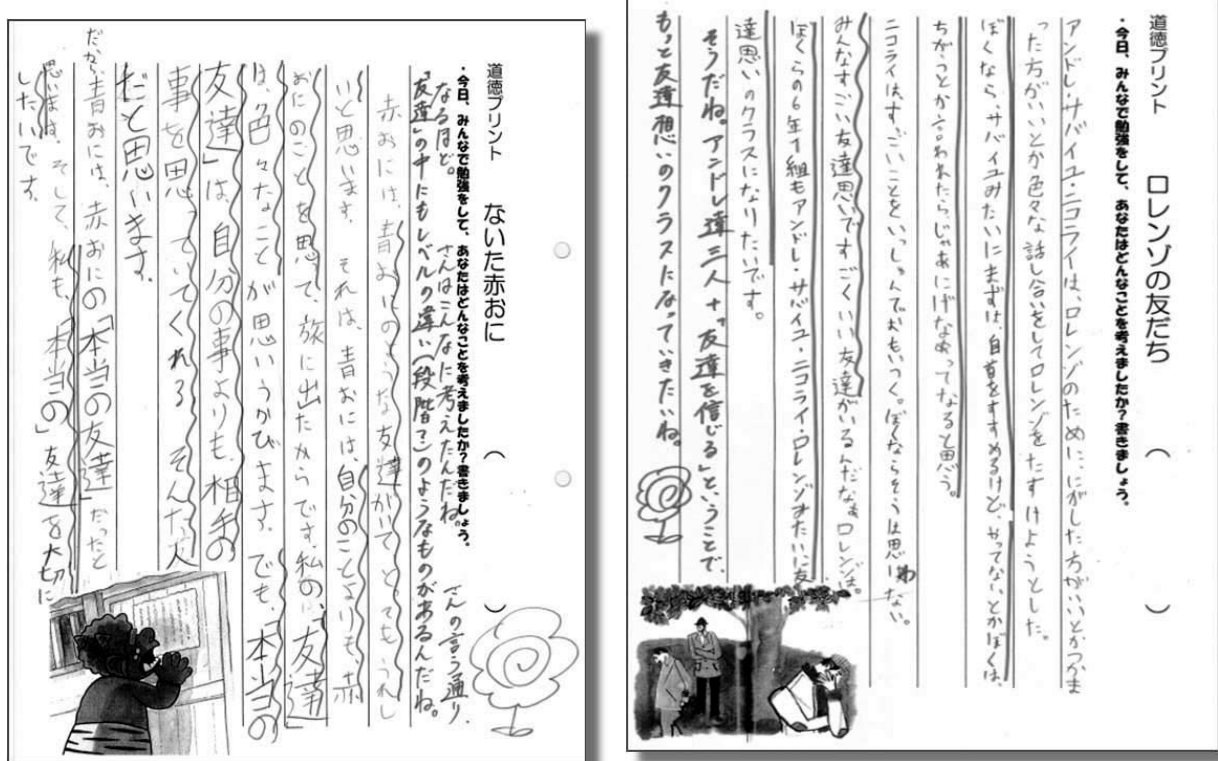


図6 道徳プリント

まず、本時のテーマに関わるものが書かれているところには―を、そして、これまでの経験や現在の自分、将来についてなど自分自身について書かれているところには～を引いている。そして、子どもの考えに対して私が感じたことを書くようにしている。

プリントを手に子どもは、引かれた線やコメントを読み、考え始める。授業を思い出している子もいる。今の自分について見つめ直している子もいる。自身のこれからについて考える子もいる。プリントをもとに友達と話を始める子もいる。

こうして、子どもは「問い」続ける。

・互いの思いをシェアする ～学級通信～

本校では、授業の終わりに子どもが書いた感想を学級通信や学校から配布する「道徳だより」に載せている。抜粋して掲載しているクラスが多いが、私の学級では、全ての子どもの感想を毎回載せるようにしている。加えて、私が授業をしていて感じたことや、子ども達の感想を読みながら思ったことを載せている（図7）。



図7 学級通信「スター」

全員の感想を掲載することにより、子どもは自分の考えを担当だけでなくクラスの仲間全員に知ってもらうことができる。そして、他の子の思いにふれ、「ぼくはこう思ったけど、〇〇さんはこんなに感じたんだな」と、考え始める。また、私のコメントを読むことで、授業についてもう一度考えたり、先生が言いたいことはこういうことかな?と自ら「問い」始める。

こうして、子ども達の思考はより深いものになっていく。

・授業の足跡を教室に ～教室掲示～

本校では、学習した資料や作文、写真、絵などを教室に掲示することで、視覚を通して子どもの意識を持続させることをねらっている。私の学級では、学級通信を並べて掲示している（図8）。

互いの感想や担任のコメント、黒板の写真などに目を向けることで、子どもは学習したことを思い出すことができる。また、並べていることで、自分達の心の成長を感じとりやすい。

こうして、子どもは「問い」続ける。

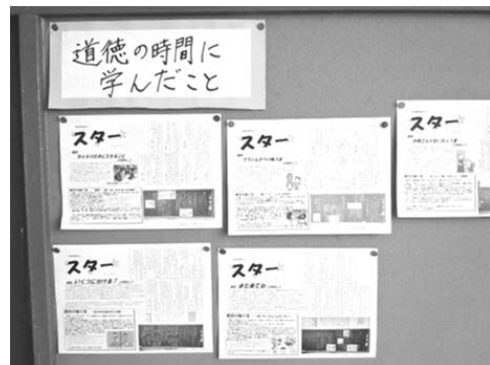


図8 道徳の時間に学んだことの掲示

③ 大人も「問う」

これまで、子どもに「問う」ために、「① 子どもが自ら「問う」」では、導入や中心発問など授業の中での工夫について述べてきた。そして、「② 授業が終わっても「問い」続ける」では、プリントや学級通信、教室の掲示など授業が終わった後の工夫について述べてきた。

本章では、道徳の時間が子どもにとってよりよい学習となるために、我々指導する側が大切にしておきたいことについて述べたいと思う。

・資料を読む ～何を読むのか～

一般的に、道徳の時間に扱う読み物資料には、「起」「承」「転」「結」があり、授業では各場面での主人公の気持ちを問うことが多い。

私は、ここに道徳授業の落とし穴があると考えている。資料を読むときに、指導者は「どこで、どんなことを聞こう」と考えながら読んでいくことが多いように思う。すると、主人公の気持ちは読んでいても、「どうしてそんな気持ちになったのか」というところまで読めていない。

そのため、各場面で発問し、子どもから出た意見に対して、「どうしてだろうね?」や「そんな気持ちにさせたものは何だろうね?」と深めることができない(図9)。

その結果、表面的な浅いところで授業が終わり、ねらいとする人間としての在り方や人間のよさを感じられない。そして、子どもは「分かっていることを聞かされただけ」という思いをもつ。

また、テーマ発問では、各場面での主人公の言動やその裏にある気持ちが、子どもがテーマについて考えていく上での手がかりとなる。こちらも、図9で示した構造を読みとっておく必要があるだろう。

指導する大人自身が、まず、「この人がこんなに思った・したのはどうしてなんだろう?」と、自ら「問い」ながら主人公と向き合い、その資料に流れている「人間としての在り方」や「人間のよさ」をしっかりと感じとりたいものである。

・指導者の立ち位置 ～授業を創る一員として～

授業で使用する資料について構造を分析し、それをもとに展開を組み立てた。さあ、いよいよ授業の始まりである。ここで、「問い」たいのは、指導者の立ち位置である。道徳の時間の主人公は一体誰なのだろうか?

「1. 道徳の「教科化」の議論 ～その背景～ ② 現在の道徳授業」において、授業者の問題点を述べたが、実際には、悩みながら授業を行っている方がほとんどだと感じている。しかし、



頑張れば頑張るほど、「こうしたい」という思いが強くなり、結果、展開に柔軟性がなくなったり、教え込んでしまうことが多くなってはいないだろうか?私もよく反省する点である。

あくまで、授業の主役は子どもである。その学びのために、子どもに問いかけ、子どもを支え、ある時には、「これって、どういうことだろう?」と、子どもと同じ目線で一緒に考えるといった姿勢を大切にしたいと私は常々考えている。

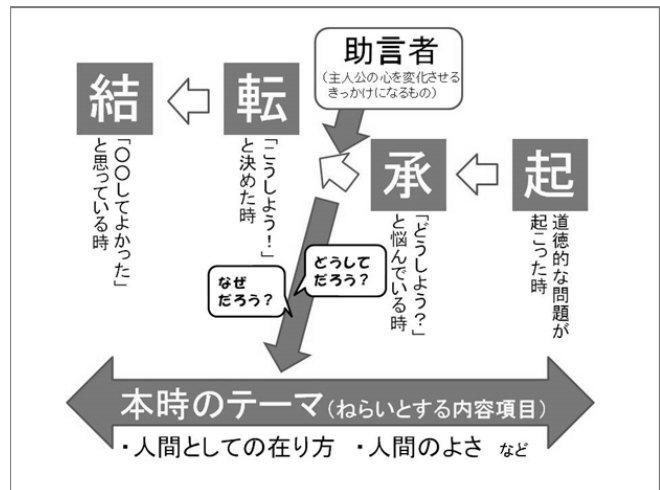


図9 道徳資料の一般的な構造

④ 保護者にも「問う」 ～発信し、共に育てる～

「1. 道徳の「教科化」の議論 ～その背景～ ① 現在の子ども」でも述べたように、現在の子どもは様々な問題を抱えていると言われている。そして、その原因を論じる際に、保護者の価値観が多様化していることや地域の教育力が低下してきていることがよく挙げられる。

では、このような現実、我々は一体何ができるのだろうか？私の実践を少し紹介したい。

「2. 「問い」続ける道徳授業 ② 授業が終わっても「問い」続ける」において、学級通信の実践を紹介した(図7)。私は、学級通信を作る際の基本形として、「子ども達に問いかける」形で文章を作成している。そして、行事予定など保護者に向けて書く場合には「保護者の方々へ」という小見出しをつけ、フォントも変えている。道徳の時間について載せたものでは、「担任の独り言」というタイトルで、授業を行って感じたことや家庭で大切にしていきたいことなど私の思いを書くようにしている(図10)。

子どもは30人いれば、1つの資料についての感じ方は30通りになる。保護者だって同じである。ましてや、価値観の多様化している現在、子どもの感想や授業の様子を載せただけでは、我々が意図していることが保護者にそのまま伝わるとは思えない。そのため、担任としての私の思いを発信することで、保護者に理解してもらい、子ども達を共に育てていきたいと考えている。

タイトルを「担任の独り言」としたのは、私の1つの工夫である。独り言とは自分の思いであると同時に、つぶやきである。「こうしてください。」や「こうでないと困ります。」といった意見でも忠告でもない。あくまで私の「独り言」である。その上で、「こうしたいですね！」や「こんなにできたらうれしいですね！」、「すごいと思いませんか？」と、「問い」かけをしている。

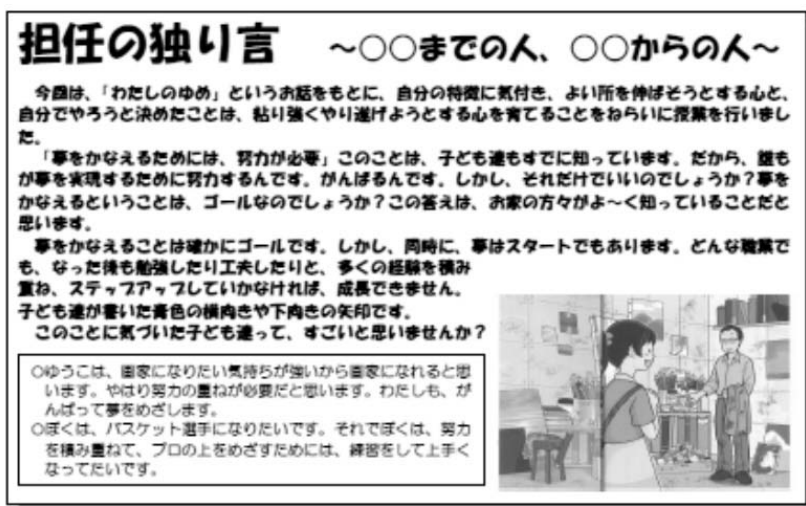


図10 学級通信の中の保護者へ「問い」かける欄

以上、道徳授業について、私なりの考えを述べてきた。その全てに共通しているのは「問う」ということである。目の前にいる子ども達にとって必要な学びは何か？そのために、何ができるのか？と、我々自身が自らに「問い」続けることが大切なのではないかと思う。そして、その思いが、本セミナーのテーマである「道徳授業の開発」や「これからを展望する授業づくり」へとつながっていくのではないだろうかと考えている。